

日本語の文章における丁寧体と普通体の使い分けについて

— 学術論文における謝辞の文章の分析を通して —

黒木晶子

1. はじめに

日本語の文章・談話では、文体に着目した場合、丁寧体（「です・ます」体）もしくは普通体（「だ」体、「である」体）のどちらか一方で統一されていることが多い。しかし、中には丁寧体と普通体の混用が見られる文章・談話もある。たとえば、学術論文における謝辞の文章がその例である。

一般に、論文は、いくつかの部分から構成されている。分野によって多少の違いはあるが、概して、「表題／筆署名」、「本文」、「文献表」の三つの部分から成り⁽¹⁾、場合によっては、これらに「謝辞」が加わる。「謝辞」とは、論文を書くにあたって受けた指導や調査への協力などに対する礼を述べた部分である。論文の末尾に記されることが多く⁽²⁾、書式としては、「謝辞」として独立して記されたり、「付記」の中においてや「注」の一つとして記されたりすることもある。

謝辞の文章は、論文の本文と同様普通体で書かれることが多い。しかし、丁寧体で書かれたり（例(1)）、前述したように丁寧体と普通体の混用で書かれたりする場合もある（例(2)）。

- (1) 謝辞：調査にご協力いただいた多くの学習者の方々ならびに先生方、そして本稿執筆に際し貴重なご助言をいただいた方々に、ここに記して感謝申し上げます。（『日本語教育』105号より抜粋）
- (2) 付記 本稿をなすに当たり、査読後に編集委員会より適切な指摘を頂いた。その結果、有益な加筆・修正を施すことができた。編集委

員の諸先生に対し、厚く御礼申し上げます。

(『国語学』197号より抜粋)

※ 部分は文が丁寧体で終わっていることを、 部分は文が普通体で終わっていることを示す。以下の用例についても同様である。

このような文体の違いはどのようなことによって生じるのだろうか。本稿では、学術論文の謝辞の文章における丁寧体と普通体の使い分けを調査することを通して、日本語の文章の文体を決める要因を考える。

2. 先行研究のまとめ、および本稿の目的

文章・談話における丁寧体と普通体の使い分けに関する研究は既にいくつかなされている。

その中で、仁田(1991)は、丁寧体と普通体の使い分けの問題は、聞き手に対する意識が関わっていると指摘している。聞き手を意識しない文章・談話の場合(仁田氏の言葉で言えば、「聞き手不在発話」の場合)、丁寧体と普通体の使い分けの問題はそもそも存在せず、普通体が使用される。一方、聞き手を意識した文章・談話の場合(仁田氏の言葉で言えば、「聞き手存在発話」の場合)、丁寧体と普通体の使い分けの問題が生じる。この場合、聞き手を丁寧に待遇する度合いが強いほど、丁寧体が使われる割合が高くなるという。

仁田氏の指摘からすると、普通体で書かれた謝辞と丁寧体で書かれた謝辞があるということは、謝辞という同類の文章が聞き手存在発話としても聞き手不在発話としても成立するということになる。しかし、両者の違いはそれだけであろうか。

本稿では、仁田氏の指摘をふまえた上で、丁寧体で書かれた謝辞と普通体で書かれた謝辞とでは、聞き手存在発話かどうかということに加えて、内容面でも違いがあるのではないかと考える。というのは、丁寧体で書かれた謝辞の場合、次のようなタイプのものが多いように思われるからである。

(3) 謝辞：①本稿をまとめるにあたり、○○⁽³⁾大学の○○先生にお世話に

なりました。②また、統計処理に関し、〇〇大学の〇〇先生
にご助言を頂きました。③お礼申し上げます。

(『日本語教育』106号より抜粋、各文の前の数字は筆者による)

例(3)は内容的に二つの部分から構成されている。すなわち、論文執筆者がその論文を書くにあたってどのような助言や協力を受けたかということに関する説明(文①、②)とお礼の言葉(文③)の二つの部分から成る。このようなタイプのものが丁寧体で書かれた謝辞には多いようである。

以上のことから、本稿では、学術論文の謝辞における文体について調査し、文体のタイプと謝辞の文章の内容とのあいだに何らかの関係が見られるのかどうかということを検討することにより、日本語の文章の文体を決める要因を明らかにするための手がかりを得たいと考える。

3. 調査対象および調査方法

今回、日本語教育、日本語学、国語学の分野⁽⁴⁾に関わる学術誌に1998年から2000年までの間に掲載された論文計206編を調査した。表1に今回調査対象とした学術誌の名前と号数を記す。

表1 本稿で調査対象とした学術誌

学 術 誌	号 数
『日本語教育』(編集：日本語教育学会)	96~99、101~107
『日本語科学』(編集：国立国語研究所)	3~8
『国語学』(編集：国語学会)	192、194~199、201、203

※研究の動向や学界の展望を特集した号(『日本語教育』100号、『国語学』193・200・202号)は、掲載されている個々の文章の構成が典型的な論文のそれとは若干異なるものであると考えられるため、今回は調査対象から除外した。

調査方法であるが、まず、調査対象とした論文について謝辞の有無を調べた。本稿で取り上げた謝辞の文章には、実際にはいくつかの形式が見られた。

「謝辞」と明記されているものもあれば、「付記」として記されているものもあった。また、少数ではあるが、「注」の一つで謝辞を記しているものもあった。本稿では、これら全てを調査対象として扱った。

次に、それぞれの謝辞がどのような文体で書かれているかを調べた。さらに、文体のタイプと内容との関係を見るために、それぞれの謝辞が内容的にどのような要素から構成されているかを調べた。

4. 調査結果

4.1. 学術論文の謝辞における文体のタイプ

今回調査対象とした論文206編のうち、謝辞が記されていたものは95編であった。これらの論文における謝辞の総数は96であった。謝辞が記されている論文の数と謝辞の総数とが異なるのは、論文によっては注の中で二箇所にわたって謝辞を記したものがあり、それらを別個のものとして数えたためである。

96の謝辞を文体によって分類すると、①丁寧体のみ、②普通体のみ、③丁寧体と普通体の混用、の三つのタイプに分けられた。それぞれの文体のタイプの謝辞が全体に占める割合は表2の通りである。

ここで注目されるのは、丁寧体のみ、もしくは丁寧体と普通体の混用、で書かれた謝辞、すなわち丁寧体で書かれた文を含む謝辞が、調査対象とした謝辞全体の45%を占めていることである。これは、論文の本文が一般的に普通体で書かれることと極めて対照的なことである。論文の本文が丁寧体で書かれることもあるが、そのような論文は少数であろう⁽⁵⁾。謝辞の文章の場合、どのような文体で書くかということに関して選択の幅が大きいことがわかる。

表2 本稿で調査した謝辞の文章の文体

文体のタイプ	該当する謝辞の数	調査した謝辞全体に占める割合
丁寧体のみ	27	28%
普通体のみ	53	55%
丁寧体と普通体の混用	16	17%

4.2. 謝辞の構成要素の種類

次に、表2に示した文体のタイプごとに、謝辞が内容的にどのような要素から構成されているかを調べた。その結果、概して、「論文の位置付け」、「恩恵説明」、「お礼の文言」という三つの要素から構成されていることがわかった。

「論文の位置付け」（以下「位置付け」）とは、その論文が、論文執筆者の他の研究との関係においてどのような位置にあるものかを説明した箇所である（例(4)）。

- (4) 本稿は平成11年度国語学会秋季大会（〇〇大学）における発表をもとに、補足・修正を加えたものである。（『国語学』201号より抜粋）

「恩恵説明」（以下「恩恵」）とは、その論文を書くにあたって論文執筆者がどのような助言や協力を受けたかということを説明した部分である（例(5)）。

- (5) 席上、多くの方々にご意見ご指導を賜った。
（『国語学』201号より抜粋）

「お礼の文言」（以下「礼」）とは、お礼の言葉そのものを指す（例(6)）。

- (6) ここに記して感謝申し上げる。（『国語学』201号より抜粋）

また、少数ではあるが、「責任の所在」（その論文の内容的に不十分なことに対する責任が論文執筆者自身にあること…例(7)、以下「責任」）や「詫び」（助言を十分に活かすことができなかったことに対する詫び…例(8)）を述べた箇所もあった。

- (7) ただし、本稿における一切の誤りは〇〇の責任であることはいうまで

もない。

(『日本語科学』4号より抜粋)

(8) 御意見を生かせなかった部分のあることをお詫びしたい。

(『国語学』195号より抜粋)

さらに、助言を受けた後、変更した箇所がある場合に、その箇所について言及したものもあった(例(9)、以下「変更」)。

(9) 編集委員会のコメントにより、本文及び注の一部を改稿した。

(『国語学』195号より抜粋)

4.3. 文体のタイプごとに見た謝辞の構成要素の組み合わせのタイプ

実際には、常にこれらの要素が全て一つの謝辞にあらわれるのではなく、いくつかの要素が組み合わさって謝辞を構成していることがわかった。表3(p.115)に、今回調査対象とした謝辞の構成要素の組み合わせのタイプを、文体のタイプごとに示す。

表3から注目されることが二点ある。

第一点は、文体のタイプによって、謝辞の構成要素の組み合わせのタイプに偏りがあるということである。

謝辞が丁寧体のみで書かれている場合、構成要素の組み合わせは「恩恵+礼」型(例(10))が多く、全体の74%を占めている。

(10) 謝辞：本稿をまとめるにあたり、〇〇大学の〇〇先生、同大学認知発達心理学の〇〇先生から貴重なご指摘をいただきました。【恩恵】ここに深く感謝申し上げます。【礼】

(『日本語教育』106号より抜粋)

※【 】内に、それより前の部分がどの構成要素に該当するかを記す。以下の用例についても同様である。

それに対して、謝辞が普通体のみで書かれている場合、構成要素の組み合わせは「位置付け+恩恵+礼」型（例(11)）が半数近くを占めている（47%）。

(11) 付 記

本稿は国語学会平成10年度秋季大会（〇〇大学）で口頭発表したものを大幅に修正・加筆したものである。【位置付け】投稿後、『日本語科学』の査読者の方から多大な御教示を頂いた。【恩恵】記して感謝の意を表す。【礼】（『日本語科学』8号より抜粋）

また、謝辞が丁寧体と普通体の混用で書かれている場合、構成要素の組み合わせは「位置付け+恩恵+礼」型（例(12)）が半数以上を占め（69%）、謝辞が普通体のみで書かれている場合と似たような傾向を見せている。

(12) 付 記

本稿は平成11年度国語学会春季大会（於：〇〇大学）における研究発表をもとに加筆・修正したものである。【位置付け】研究発表の折には、〇〇氏、〇〇氏、〇〇氏、〇〇氏、〇〇氏の各氏から有益なコメントを頂戴した。また、査読して頂いた先生方のご教示によって、有益な修正を施すことができた。【恩恵】記して感謝申し上げます。【礼】（『日本語科学』8号より抜粋）

表3から注目されることの第二点として、「恩恵+礼」型、「位置付け+恩恵+礼」型のように、全ての文体のタイプの謝辞にあらわれる構成要素の組み合わせのタイプがある一方で、普通体のみで書かれた謝辞にしかあらわれない組み合わせのタイプがあるということである。たとえば、普通体のみで書かれた謝辞のタイプとして、「位置付け+恩恵+礼+責任」型（例(13)）があるが、これは、今回の調査では、丁寧体のみ、もしくは丁寧体と普通体の混用、で書かれた謝辞には見られなかった。

表3 文体のタイプごとに見た謝辞の構成要素の組み合わせのタイプ

文体のタイプ	該当する謝辞の数	謝辞の構成要素の組み合わせのタイプ [数字：該当する謝辞の数 / () 内は全体に占める割合]
丁寧体のみ	27	<ul style="list-style-type: none"> ・「恩恵+礼」型 20 (74%) ・「位置付け+恩恵+礼」型 7 (26%)
普通体のみ	53	<ul style="list-style-type: none"> ・「位置付け+恩恵+礼」型 25 (47%) ・「恩恵+礼」型 16 (30%) ・「恩恵」型 3 (5.7%) ・「位置付け+恩恵+礼+責任」型 3 (5.7%) ・「位置付け+恩恵」型 2 (4%) ・「位置付け+恩恵+礼+詫び」型 1 (1.9%) ・「位置付け+恩恵+礼+変更」型 1 (1.9%) ・「恩恵+礼+責任」型 1 (1.9%) ・「礼+変更」型 1 (1.9%)
丁寧体と普通体の混用	16	<ul style="list-style-type: none"> ・「位置付け+恩恵+礼」型 11 (69%) ・「恩恵+礼」型 5 (31%)

(13)

付記

本稿は、平成8年度国語学会秋季大会での口頭発表をもとにその後の考察を加えたものである。【位置付け】席上その他において多くの方より御教示を賜った。また本稿をまとめるにあたり、〇〇氏より多くの御意見をいただいた。また査読者の先生方からは細部にわたりご指導をいただいた。【恩恵】ここで心から感謝の意を述べたい。【礼】ただし不備、誤り等は当然全て筆者の責に帰せられるものである。

【責任】

(『日本語科学』3号より抜粋)

5. 考察

以上のような結果から、謝辞がどのような文体で書かれるかということには、内容面からみた、謝辞の構造が大きく関係していると言えそうである。このことは、野田(1998)における指摘にも通じることである。野田氏は、丁寧体と普通体が混用されている文章・談話を取り上げ、こうした現象は文

章・談話の構造を反映したものだとしている。野田氏は、文章・談話を構成する文を、聞き手に対する意識の強さに応じて、表4に示すような5つの種類に分類している。

表4 文章・談話を構成する文の種類

心情文	話し手の心情を表す文
従属文	ほかの文に従属している文
事実文	事実だけを客観的に述べる文
主張文	判断や説明を表す文
伝達文	質問や命令を表す文

※ 野田 (1998, p.95) をもとに作成した。

そして、表4の下の方に位置する文ほど、聞き手に対するはたらきかけが強い内容を表し、丁寧体になりやすい、としている。

以上のような野田氏の主張をふまえると、学術論文の謝辞についても、謝辞を構成するそれぞれの要素と、(この場合は謝辞という文章なので「聞き手」ではなく「読み手」になるが,) 読み手に対する意識の強さとの関係が指摘でき、それが文体の決定に関わっていると言える。以下、読み手に対する意識という点から、今回明らかになった謝辞の構成要素および表3の結果について考えてみる。

まず、「礼」であるが、これは、お礼の言葉そのものであり、礼の相手にはたらきかける内容を表すものである。野田氏による文の分類で言うと、伝達文もしくは主張文に相当すると考えられる。本稿における調査対象である学術論文の謝辞の場合、論文執筆者が礼を述べるべき相手が論文の読み手の中に含まれている可能性がある。よって、論文執筆者は自分が礼を述べるべき相手を含むであろう読み手を強く意識することになり、その結果、「礼」の部分に丁寧体が使われやすくなると考えられる。

「恩恵」は、その論文を書くにあたって論文執筆者がどのような助言や協

力を受けたかということの説明した部分である。野田氏による文の分類で言うと、事実文に相当すると考えられる。しかし、これも礼を述べるべき相手の存在があって成立する事柄である。したがって、「礼」と「恩恵」が組み合わさった「恩恵+礼」型の謝辞の場合、読み手を意識した文になりやすく、丁寧体が使われやすいと考えられる。

「位置付け」は、その論文が、論文執筆者の他の研究との関係においてどのような位置にあるものかを説明した箇所である。これは事実文である。したがって、「位置付け」のみでは、文体は普通体になると考えられるが⁽⁶⁾、「恩恵」および「礼」と組み合わさることにより、書き手の読み手に対する意識の強さに応じて、丁寧体のみ、普通体のみ、丁寧体と普通体の混用、のいずれかの文体で書かれると考えられる。

このように、読み手に対する意識の強さから見た文の種類というのがその文の文体を考える際の手がかりとなるということが、学術論文の謝辞についても言えそうである。しかしながら、今回明らかになった謝辞の構成要素の中には、文の種類からでは文体を判断し難いものもあるようである。それは、普通体のみで書かれた謝辞にのみあらわれる「詫び」（例(14)の太字部分）と「責任の所在」（例(15)の太字部分）である。

「詫び」は、助言を十分に活かすことができなかったことに対する詫びであり、「責任の所在」は、その論文的内容的に不十分なことに対する責任が論文執筆者自身にあることを述べたものである。

- (14) [附記] 本稿は平成六年春頃に得た着想にもとづく。【位置付け】その前後から何度か〇〇先生の〇〇大学大学院国語学演習で検討の機会を頂いた。【恩恵】〇〇先生と、貴重な御意見を頂いた【恩恵】諸氏に感謝申し上げます。【礼】また草稿ができあがった段階で行った〇〇大学国語研究室会（平成九年七月五日）の発表の機会などに、御意見を頂いた【恩恵】〇〇先生、〇〇先生ほかの諸先生にも感謝を申し上げますとともに【礼】、御意見を生かせなかった部分のあることをお詫びしたい。【詫び】（『国語学』195号より抜粋）

本稿は、平成8年度国語学会秋季大会での口頭発表をもとにその後の考察を加えたものである。【位置付け】席上その他において多くの方より御教示を賜った。また本稿をまとめるにあたり、〇〇氏より多くの御意見をいただいた。また査読者の先生方からは細部にわたりご指導をいただいた。【恩恵】ここで心から感謝の意を述べたい。【礼】ただし不備、誤り等は当然全て筆者の責に帰せられるものである。

【責任】

(『日本語科学』3号より抜粋)

「詫び」は、先に見た「礼」同様、相手に対するはたらきかけのある内容である。しかも、論文の読み手の中に論文執筆者が「詫び」を述べるべき相手が含まれている可能性がある。しかし、今回の調査では、「詫び」は普通体で書かれた謝辞にしかあらわれていない。「責任の所在」は、論文の内容的不備が執筆者本人にあるという事実を述べた部分であるので、普通体で書かれた謝辞にあらわれることは当然と言える。しかし、先に見たように、同じように事実を述べた箇所である「恩恵」、「位置付け」は、丁寧体のみ、普通体のみ、丁寧体と普通体の混用、の全ての文体のタイプにあらわれる。このことから、例が少ないのではっきりしたことは言えないが、単にその文が読み手を意識した内容かどうか、すなわち、読み手にはたらきかける内容かどうかということで文体が決まるわけではないとも考えられる。「詫び」や「責任の所在」の場合、これらが書き手にとって、積極的に読み手を意識して書くことがはばかれる、つまり、読み手に積極的に提示することを差し控えさせる内容であるということが、普通体という文体を書き手が選択したことの要因とも考えられるのである。いわば、文の内容に対する書き手の心理といったものも文体の決定に影響しているのではないだろうか。しかしながら、これは現段階では推測の域を出ず、今後さらに多くの用例を調査する必要がある。

6. おわりに

本稿における調査から明らかになったことは次の二点である。

- ① 学術論文の謝辞の場合、どのような文体で書くか（丁寧体のみ、普通体のみ、丁寧体と普通体の混用）ということに関して、論文の本文に比べて選択の幅が大きい。
- ② 謝辞がどのような文体で書かれるかということには、内容面からみた、謝辞の構造が大きく関係している可能性がある。

しかしながら、②については、5でふれたように、他にもいくつかの要因が関わっていると考えられる。詳しい考察は次稿にゆずるが、先行研究で指摘されている事柄も含めて、いくつかの要因が絡み合って文体の決定ということが行われていると考えられる。

今後は、学術論文の謝辞に限らず幅広く用例を調査し、日本語の文章における文体の決定に関わる個々の要因のあいだの関係を明らかにしたいと考える。

注

- (1) 佐久間 (1994, p.261) による。
- (2) 筆者が知る範囲では、『言語研究』（日本言語学会発行）に掲載されている論文は、その論文の最初のページの脚注で謝辞を記しているものが多いようである。
- (3) 本稿では、用例中の固有名詞については、考察の内容とは関係しないため、場合によってはこのように省略した形で記す。
- (4) 用例の偏りを避けるため、より広範な分野から用例を集めるべきであると考えるが、本稿は考察の第一段階であるため、筆者が入手しやすい分野の学術誌を調査対象とした。
- (5) 本稿で調査した論文206編のうち、本文が丁寧体で書かれていたものは皆無であった。
- (6) 今回調査対象とした学術論文206編のうち、謝辞がなかったものが111編あった。これらのうち18編において、「位置付け」が、「付記」として、あるいは、本文から一行あけたところに記されていたが、いずれの場合も普通体で書かれていた。

参考文献

生田少子・井出祥子 (1983) 「社会言語学における談話研究」『言語』12-12 pp.

77-84 大修館書店

佐久間まゆみ (1994) 「論文の構成と書式」『ハンドブック 論文・レポートの書き方』 pp.260-266 明治書院

仁田義雄 (1991) 「言表態度の要素としての丁寧さ」『日本語のモダリティと人称』 pp.185-202 ひつじ書房

野田尚史 (1998) 「『ていねいさ』からみた文章・談話の構造」『国語学』194号 pp.89-102 国語学会

メイナード・K・泉子 (1991) 「文体の意味—ダ体とデスマス体の混用について—」『言語』20-2 pp.75-80 大修館書店